

平成22年度 学校自己評価表(最終評価)

中長期目標 (学校ビジョン)	「倉吉東高のかたち」の理想に沿って、本校の教育活動を更に充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。	今年度の 重点目標	1 学校文化度の向上と地域からの信頼向上 2 学校教育力の向上 3 進路指導の充実 4 専攻科教育の充実 5 定時制教育の充実
-------------------	--	--------------	---

年度当初					最終評価(3月)		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	中間評価以降の経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善策
1. 学校文化度の向上と地域からの信頼向上	規律ある生活と「文武両道」による自立の促進	・校内に品位と落ち着いた爽やかな雰囲気を感じられる。 ・生徒自身が環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 ・全員が部活動に加入し、積極的に活動するとともに、切り替えを上手に行い、勉学に励んでいる。 ・自分の置かれた立場や場面に相応しい言動ができる。 ・教員に「率先垂範」の姿勢が浸透している。	・集団生活を行う上での基本的マナーが身についていない生徒が一部にいる。 ・清掃等の場面で主体性に欠け、受け身の態度で行動する生徒が見られる。 ・部活動の加入率が高いが、一部にけじめのある活動ができていない部がある。 ・学校生活の中で時として集団の和を乱す生徒がいる。 ・生徒に自ら範を示そうという姿勢が浸透しつつある。	・機会を捉えて指導・面談を繰り返すことにより、指導7項目を遵守させる。 ・TEAS(鳥取県版環境管理システム)・LHR等で生活環境委員会が主体となって生徒自身が環境整備に主体的に取り組む意識を高める。 ・部顧問・外部指導者・担任等が連携し、文武両道が実現されるよう働きかける。 ・粘り強く個別指導を行い、自己の責任と集団に与える影響について自覚させる。 ・職員が「倉吉東高のかたち」の実現に向けて、それぞれの取り組みを職員研修等で情報交換することにより、目指す方向性を共有する。 ・学びの主体性を育成するための研究を組織的継続的に行う。	・学年集会やHRでの積極的な働きかけにより集団生活を行う上でのマナーやその場に相応しい言動が身についてきた。 ・挨拶や服装は改善が認められるが、生徒自身がゴミ削減、節電等を含めた生活環境の整備に主体的に取り組むことに課題がある。 ・課題提出の徹底や放課後学習会への参加を通して勉学と部活の両立に向けて努力する姿が見られる。 ・全校遅刻ゼロの日が倍増(10日)した。 ・教員の姿勢は、概ね生徒の模範となっている。	B	・生活環境等の整備に生徒が主体的に取り組めるように生徒会各委員会と教員が協働して仕組みを作る。 ・生徒会部活動常任委員会を活性化して、部活動相互の連携を密にし、各部員が文武両道の意味を理解して活動していくことに努める。
	中高連携の強化と高大接続の円滑化	・各中学校に本校の教育方針や教育内容が十分理解され評価されていると同時に、本校も各中学校の実態を十分理解している。 ・生活指導・学習指導について、中学・高校の連続性がある。 ・中学教育を支援するため、本校が持つ資源を積極的に提供している。 ・生徒が、単に大学に合格するための学習を越えて、生涯にわたる学習の基礎となる重厚な学びを行っている。 ・職員の誰もが本校の目標や実態を外部の人に説明できる。	・本校の教育方針・教育内容・生徒指導などについて、中学校教員や生徒、保護者の理解が不十分な点がある。 ・数学、体育以外の教科について連携があまり見られない。 ・高大連携について、英語(鳥取大学)以外は、大学紹介のレベルで終わっている。 ・年に数校大学訪問に行き、大学情報の把握と職員への提供を行なっている。	・分掌担当の教員を中心に、全職員でHPの更新を行い、中学生向けの情報発信を充実させる。 ・高校説明会で本校に来た生徒に対し、チューターを中心に多くの在校生が説明を行ない、生徒の視点で倉吉東高の魅力を伝える。 ・中学生特別講座への参加拡大を促進すると同時に、中学教員の参加(参観、T-Tなど)を呼びかける。 ・中学校出前授業に積極的に応じる。 ・中学校説明会・進路学習の機会を利用して、教員が積極的に中学校に出向き、本校の理解が深まるよう工夫する。 ・本校へ学校訪問等に来られた外部の方への説明を、進路指導部や教務部以外の教員も行い、本校の取り組みを外部に発信する能力の向上に努める。 ・大学教育の研究を進め、本校教育と連携できる内容を検討し、教員や生徒の参加体験受講を実施する。	・HPの頻繁な更新を継続し、本校の教育活動の広報に努めた。特に海外研修やスキー研修などの泊を伴う学校行事に関しては当日の情報を現地で更新することができた。また、3月上旬には通算アクセス数が23万3000件を越え、本年度のアクセス数は17万件を見込める。 ・中学生向け英語特別講座に関しては少人数ながら熱心な講義が行われ、参加者からは好評を得た。内容は今後育友会のHPIに動画で掲載される予定である。 ・中学校の進路学習に、中学OGの本校生徒や本校教員が出向き、東高の説明を行った。 ・図書館ゼミを利用して、9月に岡山大学の教授を、2月には鳥根大学の特任講師を招いての特別講義を行い、物理学や心理学の興味関心を高めた。	B	・HPの更新に関しては一定の成果があったが、もっと記事の更新頻度を増やし、学校情報を発信していきたい。またHPのインターフェイスも改善し、見て楽しく、探したい情報に楽にたどり着けるような使いやすいものに変えていくことも必要である。 ・在校生の力を、中学生への情報発信に生かしていきたい。夏休みの高校説明会や、中学校に出向いての説明会などで、在校生の力を活用していきたい。 ・高大接続については、図書館ゼミでできた良い流れを継続し、生徒の必要に応じて適切な講師を依頼し、生徒の興味関心の扉を開いていきたい。
2. 学校教育力の向上	教科指導力の向上と教員研修の充実	・教員一人ひとりが、高い教科指導力を持ち、授業を通して各教科の魅力や奥深さを生徒に伝えている。 ・テストや大学受験といった実利的目的を越えて、生徒の学びが真理探究といった高次なものとなるよう指導が行われている。 ・生徒の進路希望や発達段階に応じて、教師が集団として時宜にかなった教科指導を行っている。 ・指導力を高めるための教員研修が積極的に行われ、その成果が日々の学習指導に還元されている。	・生徒の学習が内発的・主体的なものへ高まっているとは言えない部分がある。 ・生徒の学習が課題提出やテストなどに追われている傾向が依然としてある。 ・生徒個々の進路志望や発達段階に応じたきめ細かい教科指導を教員集団全体として十分に行えているとは言えない部分がある。 ・教員研修の成果が日々の学習指導に十分に還元されていない。	・「授業で勝負」の精神を教員間で確認し、魅力的な授業を行うための教材研究や工夫を行う。 ・魅力的かつ効果的な授業を行うために、教科内はもちろん、他教科の授業相互参観を実施する。 ・年2回実施する生徒による授業評価アンケートの項目について見直しを行い、生徒の状況の把握や教員の授業に対する客観的評価ができるようなものにする。 ・授業評価アンケートの結果分析をより詳細に行う。 ・教科指導先進校教師招聘事業を積極的に実施し、事後の研究会を通して教科全体の指導力向上を図る。 ・予備校派遣研修を行い、研修報告書を作成し、活用できる指導ノウハウを教科会で共有化し、日々の学習指導で生徒に還元する。 ・定期考査、進路指導テストなどの問題作成において協議・検討を行い、学習到達度を確認するとともに、3年間を見通した教科指導を行う。 ・本校で計画、実施している様々な指導力向上プログラムが効果的に機能するように研修部を中心に随時チェックし、機能するように工夫する。	・他教科の授業も含め、授業相互参観を前期に実施。後期にはエキスパート教員による研究授業等を本校を会場に行い、県内外より多数の参加者との熱心な意見交換や研修をし、生徒への指導にいかされた。 ・授業評価アンケートを6月と11月に実施。教員の指導の在り方と生徒の学習への取り組みについて分析・検証。学びの質は徐々にではあるが高まっていると考える。 ・授業参観や教科指導先進校教師招聘、予備校派遣等の本校独自の取り組みをいかして身に付けたノウハウや工夫を生徒との綿密な面接を通して個々の状況や課題に応じてきめ細かい指導が行えた。その成果が3年生のセンター試験の結果につながった。 ・定期考査や進路指導テストなどの問題作成についての活発な協議や検討が行われており、3年間の教科指導計画に基づき、各教科・学年で適宜修正等が加えられながら学力育成が行われている。	A	・各種の教員研修について、研修部が中心となり、計画的かつ効果的に実施できるようにさらなる工夫を行う。 ・授業評価アンケートの項目についての見直しが行えなかった。次年度以降の課題とする。生徒による授業評価が授業改善に役立つように早期に集計・分析を行い、活用できるよう努力する。 ・教員研修の成果を生徒へ授業以外の機会でも還元できる方策を模索する。例えば大学訪問で得た情報を生徒に直接伝える報告会の開催など。

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	中間評価以降の経過・達成状況	評価	次年度に向けての改善策
3. 進路指導の充実	教員の進路指導（進路目標を見据えた生き方指導）力の向上	・進路指導が単なる「出口指導」に終わることなく、生徒が「学力＝生活力」であることを自覚しながら、その意識が「今・自分・権利」だけでなく、「将来・社会・責任貢献」へと開かれるような、生き方指導を行っている。 ・生徒の志望と適性を理解し、生徒にとっての望ましい方向性をイメージしながら、3年間のどの段階においても適切な助言を行っている。	・3学年の指導の重要性を理解する教員が多くなった半面、低学年時の進路指導においてキャリア教育の観点でとまどう場面もある。 ・3年間を見据えた系統的な教科・進路指導計画を立案し実行しているが、各時期において十分な達成度が得られていない場合がある。また今のことで精一杯となり、将来への意識を持つことができない生徒もいる。 ・生徒の志望や適性を理解するために教員と生徒との面談を随時行っている（クラス担任、分掌主任など）。しかし学年・教員により多少の情報量の差がある。	・学校訪問対応、中学説明会対応等の機会を研修の機会とし、多くの教員がその役割を果たす。 ・新旧3・専担任会や判定会等を進路研修会として学年の枠を超えて引き継ぎや内容を共有し、本校の進路指導の指針を明確化する。 ・志望校決定のLHRだけにならないよう、キャリア教育の視点で進路LHRを計画・実践する。 ・読書・小論文指導を重点指導項目とし、生徒が現代社会を考察し語れるようになるよう、小論文活動を推進し支援する力を養う。 ・3年間を見据えた教科・進路指導を効果的に行うために、綿密な学年会を行い、生徒との面談や家庭学習調査、各試験結果分析などを通して得た情報を教員間で共有し、個々の生徒への指導をきめ細かく行う。 ・全教員参加の研修会を随時行い、同じ方向性で組織的な指導が実践できるようにする。 ・全国的な情勢を掴むために、適切な時機をとらえて教員・生徒・保護者に対して様々な研修会を実施する。	・3回（6月・12月・1月）行われた3・専進路判定会において、いずれも40名近くの教員が参加し、3年担任だけでなく、多角的視点ですべての生徒の進路を考えることができたとともに、よい進路指導研修会となった。 ・新旧3・専担任会や進路のしおり等で旧3年団の進路指導の数値化できない部分のノウハウを伝承してもらうなかで、現3・専の担任団が見通しを持って生徒に向かうことができた。 ・読書講演会を実施し、生徒・職員とも読書と創造力の関係について共有した。 ・8月に進路講演会を全校生徒と保護者向けに行い、全国的な情勢の把握と3年間を見通した学習、進路意識の向上につなげることができた。 ・各教科や進路部と連携しながら学年会を実施し、クラス間で生徒への指導に差が出ないよう留意しながら、学年団全員が全生徒の情報を共有し指導した。 ・3年生は、学年を追うごとに生涯学習につながる学びの姿勢が身につく、生活態度も向上した。	B	・図書館ゼミなど直接生徒と関わる指導等で企画運営のできる教員を増やす。 ・学習の教科バランスを考慮しながら、時期に応じた適切な指導ができるようビジョンをもった指導ができる力を養う。
	国公立大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・現役合格者数150名。 ・ブロック大学レベル以上合格者数現浪合計70名。	（現役合格） ・昨年度175名。一昨年度126名。一昨々年度138名。 （ブロック大学レベル以上合格者数） ・昨年度83名。一昨年度55名。一昨々年度51名。	・授業、放課後学習、家庭学習の差異化をはかり、それぞれの学習の意味づけや関連づけを面接を通して伝える。 ・生徒の学力実態を正確に分析し、遅進者指導を迅速かつ手厚く行う。 ・志望校合格実現への面接は、担任だけでなく教科担当も関わり、生徒1人1人が何をどう学習すべきか具体的に支援する。 ・教員は校内・校外模試の意義を理解し、生徒に常時伝えるとともに、保護者に対しても学年通信やホームページを通じて伝達する。 ・各学年、各時期の到達目標偏差値を確実に達成する。	・3年生においては、年度当初から英語の課外を実施し、多くの生徒の苦手意識改善につながった。 ・夏の大山合宿では、教養類型126名が参加し、卒業生や職員とともに、集団で学習することの重要性を理解した。夏休み明けの学習会では参加する生徒数が増えた。 ・秋やセンター後の3・専合同課外で志望別に3・専が互いに切磋琢磨することにより、学力の維持向上に努めた。年末年始には、各教科の分野別課外等も行い、センター試験においては、昨年に次ぐ成績を収めることができた。 ・目標程度の合格者数が見込める。	A	・今年度、「チーム看護」や「文系数学集会」など、適宜クラスの枠を超えて集団化する場面があったが、次年度も学年の特徴を早くから察知しクラスの枠を超えた学力向上に努める。
	難関大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・現浪合計20名以上。 ・東京大学5名。	（難関大学） ・昨年度33名。一昨年度17名。一昨々年度12名。 （東京大学） ・昨年度4名。一昨年度2名。一昨々年度1名	・各教科で、昨年度の実績や指導法を確認伝達し、効果的な指導法は継承していく。 ・各教科で大学入試問題研究を充実させ、各志望レベルに応じた学力育成プログラムを作成し、授業や課外に即反映させる。また、適宜教科面談を実施し、個に応じた適切な情報提供や進路指導・学習指導を行う。 ・OBや専攻科生を利用し、実績ある先輩の学習法や心構えを下級生に伝える。 ・明確な目的をもった文理学習クラス検討会を定期的に開催し、一貫した指導を行う。	・9月より3年生と専攻科の合同課外を実施しており、難関大志望者も現浪が切磋琢磨する環境で学習できた。 ・超難関大志望者は、文武とも学年を引っ張り、順調に出願することができた。2・3・専合同の東大合宿では、学園祭のように学年を超えて目標に向かう場面もあった。 ・低学年では、2年生において、県の企画する難関大合宿、岡山県の高校との英数合同合宿、1年生の首都圏研修、年末の1、2年文理学習合同数学講座等で校内外から高い刺激を受け、次年度での学習の見通しをつけた。	B	・専攻科廃止決定も考慮し、低学年からの文理学習クラスの系統的な取り組みを検討する。
4. 専攻科教育の充実	鳥取県の専攻科として信頼される専攻科	・県内各地から集まった生徒一人ひとりが県立の専攻科である意味を理解し、学問に対して誠実に主体的に取り組むことに加え、公共の利益に資する精神を涵養している。 ・生徒一人ひとりの学力差に応じたきめの細かい指導により、潜在能力が引き出され、難関大学合格者が増加している。 ・広く県民から専攻科の存在価値が認められている。	・県の専攻科として幅広く認知され、中部地区の高校だけでなく、東部地区、西部地区の高校卒業生も入学している。 ・専攻科志願者が、4年続けて定員を2桁以上上回っている。 ・鳥取県立の専攻科で学べる意義を認識させ、大学に合格すればよいという考え方でなく、真の学びを各自に自覚させている。 ・近年順調に実績を上げている。今年度は、東京大学に2名をはじめ、名古屋大学、大阪大学などの難関校に合格者を出している。 ・今年度、本校の専攻科の存廃の決定がなされることになっている。	1. 学びに向かう姿勢づくりを企画し、自ら発信する学びを実践させる。 2. 「見る・聞く」を中心とした学びから、「話す・書く」ことを中心とした学びに転換していく。 上記1、2. の具体的内容として ・始業前（8：00～）の早朝学習を行う。 ・「学び祭り」を実施（7月）し、各自が発表テーマを設定・研究し、プレゼンテーションを行う。 ・あらゆるジャンルの書籍の読書をすすめていく。 ・生徒が新聞記事の選定、論述を、ルーム日誌に表現させ、自己の意見を表現させる。 ・志望校別指導（基礎力未定着者、超難関校志望者）に対する指導を放課後課外、休日課外などを利用し、全教員によるバックアップで行う。 ・3年生と専攻科生の合同学習会 志望大学別課外などを実施する。	・昨年に比べセンター試験が易化したとはいえ、現役当時と比較し、平均124点／900点得点が伸びた。 ・異なった教育環境で学んできた生徒達が、まずは時間の管理、服装・挨拶など基本的な生活習慣を確立し、社会に通じる人格を形成するとともに、大学受験に必要な学問のみの習得ではなく、自らが主体的に広く学問に取り組む姿勢を身に付けた。また、生活の中で集団行動の大切さや講演会などにより「他者への感謝」や「他者からの感謝」を知り、人として社会の一員としてどのように行動していくのかを身に付けた。 ・生徒が自分の嗜好にあった学問のみを学習するのではなく、「広く学問に触れること」を受け入れてきたことで、今まで潜在していた能力が開花し、各自のセンター試験の得点や成績が大きく伸び、難関大学を目指す生徒が増えた。	A	・生徒一人一人の学力に応じた学習計画や志望校をより具体的に設定するための働きかけを早期に行う。（保護者を含めた懇談会の実施など） ・以前に比べ資格取得にこだわる生徒が増えた。職員が生徒の専攻科生活で新たな良い面に気づきそしてそれを伝え、違った角度からも進路先を考えてほしかったが、受け入れることができない生徒が多かった。適切な進路選択をする上で、参考になる話を、大学のキャリアサポーターに聞く機会を設けることも検討してみたい。 ・専攻科出身のOB・OGの講演会を実施する。
5. 定時制教育の充実	退学者・休学者の減少	・教員連携及び家庭との連携が強化され、退学者・休学者が減少している。 ・生徒が規律とけじめのある基本的な生活習慣を確立している。 ・進路保障の観点からわかりやすい授業が行われ、生徒の基礎学力が定着している。	・休学者0からのスタートであるが、さまざまな事情により支援や指導を必要とする生徒が多い。 ・はっきりとした進路意識が乏しく、学力面で厳しい生徒も少なくない。	・職員連携を密にし、生徒個々をよく理解し、保護者と連携して機会をとらえ粘り強く指導する。 ・要点をまとめたプリントや練習問題集を活用し、基礎学力の定着に努める。 ・積極的に中学校へ外向き、中学生に進路目的を持って入学するよう働きかける。	・職員連携を密にし、保護者と連携して粘り強く指導した。休学者・退学者にはその後のことも考慮して指導した（＋B）。 ・進路保障の面から、基礎学力が定着するよう授業改善に努め、進学希望者等に対しては課外や個人添削を実施した（＋B）。 ・学校行事、生徒会活動等を活発化するとともに、HPを更新して、活動情報を提供するように努めた（＋B）。	B	・キャリア教育を1年次から充実させ、望ましい職業観を養う。 ・卒業後の進路を明確にさせ、それに向け地道に努力させる。 ・基礎学力が定着するよう一層授業改善に努めるとともに、進学希望者等に対し、個人添削や課外を実施する。

○ 評価基準

A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80％以上になっている。

B 課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、50％～80％の範囲内になっている。

C 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。一定の成果が上がっているが、課題も多く、今後の改善があまり見込めない。数値的目標を掲げた項目では、最高でも50％未満である。

- ・生活習慣が確立できない生徒に対して、その都度面接をするとともに、家庭との連絡を密にとり
- ・「生徒自らが学びそして発信する」姿勢を、ルーム日誌等活用しながら継続して指導していく。

指導を続けていく。

- ・現在までの成績の伸び具合で志望校にも変化が起きると考えられる。志

望については弱気にさせず、生徒を元気づけるよう今後の学習計画など個別の指導を続けていく。

